

バスケット・ボール選手の性格特性および得点と ボール処理能力と性格との関係*

—女子バスケット・ボール選手の指導に関する一考察—

青井水月

I 目 的

この研究はアメリカにおける「MMPI による運動競技者のパーソナリティの特性¹⁾」の中で運動競技者と非運動競技者間、および個人スポーツ、チームスポーツでパーソナリティに差がみられることを明らかにしているので、MMPI の原版²⁾を日本人向きに改訂した東大改訂版を使用して、バスケット・ボール選手の性格特性を考察し、合せて、個々のプレイヤーの得点能力、ボール処理能力の技術面の優劣によって MMPI の臨床スケール、の上に差異がみられないかを考察しようとするものである。

(1) 昭和36年度関東女子実業団の上位4チームに所属する選手52名と、これら選手と同一年令層にある女子学生100名との比較、また実業団選手と同一職場に勤務する同集団内の女子職員(非運動競技者)20名に MMPI テストを課し、各スケールの比較を考察する。

(2) 昭和36年1月、全日本選手権を獲得したチームに所属する選手8名について、各人が公式戦9ゲームに出場した記録から、各選手の得点能力とボール処理能力指数を抽出し、この2面の技術的上位者と下位者との間に、MMPI 臨床診断尺度の上でどのような差異があるかを考察しようとするものである。

II 方 法

(1) 調査には MMPI 東大改訂版³⁾を使用した(数多い性格検査法の中で MMPI を採用したのは被検者の記入態度をみるための妥当性尺度によ

* MIZUKI AOI: The Disposition of Female Basketball Players and the Relation between their Disposition and Ability to shoot or handle Balls

って信頼度の検討がしやすいこと、また性格を多面的にとらえようとしていること、将来、社会的責任尺度、支配性尺度、偏見尺度等の追加尺度をみようとするのが MMPI の根本構想になっているため、スポーツマンの性格特性を把握するのに適すると考えたからである)。

(2) 標準群の設定

別表のように、一般成年女子150人について MMPI のプロフィールをつくり、これを標準スケールとして、このプロフィールの上に女子バスケット・ボール選手、一般女子学生、および、コントロール群として女子職員のプロフィールを記入した。

第1表 被検者の構成

(1) 一般成年女子 (N=150)

年令別表	職業別表	学歴別表	
15~19 14	専門技術管理職	小学・新制中卒	21
20~24 29		7 新制高・旧制中	118
25~29 34	事務	17 新旧大学・旧専門	11
30~34 24	運輸・技能	16	
35~39 16	サービス	13	
40~44 16	無職	97	
45~49 11			
50~54 5			
55~59 1			
		未婚・既婚別表	
		未 婚	59
		既 婚	90
		不 明	1

(2) 実業団女子 B・B 選手 (N=52)

K 銀: 17	T 電: 10	M 生: 10	D 紙: 15
年令: 18~22		学歴: 新制高卒	

(3) 女子学生 (N=100)

東女大 35	津 田 35	都大女 30
--------	--------	--------

(4) コントロール群 (N=20)

K 銀女子職員	年令 18~22	新制高卒
---------	----------	------

(3) 被検者の構成

(イ) バスケット・ボール選手の性格特性をみるために対象として、昭和35年度関東実業団女子チームの中から上位4チームに所属するプレイヤー52人を選出してMMPIを課した。

(ロ) 一般女子学生群

バスケット・ボール選手と同年齢(18~22才)の一般女子学生100人を選出してMMPIを課した(東女大生35名、津田塾大生35名、都大生30名)。

(ハ) コントロール群

K銀バスケット・ボール女子選手17名との比較をみるために同一職場に勤務する一般女子職員20名(年齢18~22才)いずれも新制高卒を対象にMMPIを課した。

(ニ) プレーと性格との関係をみるために昭和35年度全日本総合選手権優勝チームK銀選手の中、公式戦(昭和36年度春季関東実業団リーグ7試合、東西対抗戦2試合)に出場した選手8人を対象とした。この8人のプレイヤー各人がゲーム場面において

如何にチームの上に貢献したかをみる一つの方法として、各人の得点能力指数とボール処理能力指数とを公式戦記録の上から算出した(東大教養学部体育科紀要第1号参照)。

(a) 得点能力指数

公式戦9ゲームにおける各人の得点合計を各人の総出場時間で除し、1分間

あたりの得点能力を算出した。

(b) ボール処理能力指数

ゲームにおけるプレイ場面から、ルーズ・ボールをとった回数および、相手チームが持つボールをインターセプト、フォロー等により味方ボールにすることができたプレイの回数をプラス(+)
プレイとし、逆に味方が保持するボールをバイオレーションやミス・ショットによって相手チームにボールを渡す原因となったプレイをマイナス(-)プレイとして記録し、このプラス、マイナスの集計を、各人の出場時間で除すことによって1分間あたりのボール処理能力指数として算出した。

この得点能力指数の高位者1位から8位までの順位と、ボール処理能力指数の順位1位から8位までの組合せによって、個人の総合順位をえらんだ。

III 結果の考察

(1) バスケット・ボール女子選手(以下B・B)

	出場時間	得点	得点能力指数 (得点÷出場時間)	順位	(+) プレイ (-) プレイ	ボール処理 能力指数	順位	総合 順位
O	344分	188	0.546	1	123 75	0.140	4	2
F	276	132	0.478	2	107 51	0.202	1	1
K _T	272	69	0.253	6	91 42	0.180	2	4
Y _M	221	54	0.244	7	87 58	0.126	5	7
I	195	61	0.312	3	34 41	-0.035	8	5
K _S	192	57	0.297	4	62 29	0.171	3	3
S	121	28	0.231	8	21 15	0.049	7	8
Y _S	80	21	0.262	5	27 18	0.112	6	5

第1図 得点能力指数とボール処理能力指数からみた総合順位

と略)と一般女子学生との考察

(イ) B・B選手52人と女子学生100人にMMPIテストを課し、妥当性尺度4項目および臨床診断スケール10項目についてそれぞれ粗点を求め、Tスコアに換算して標準群プロフィールの上に各スケールを記入した(第2図)。

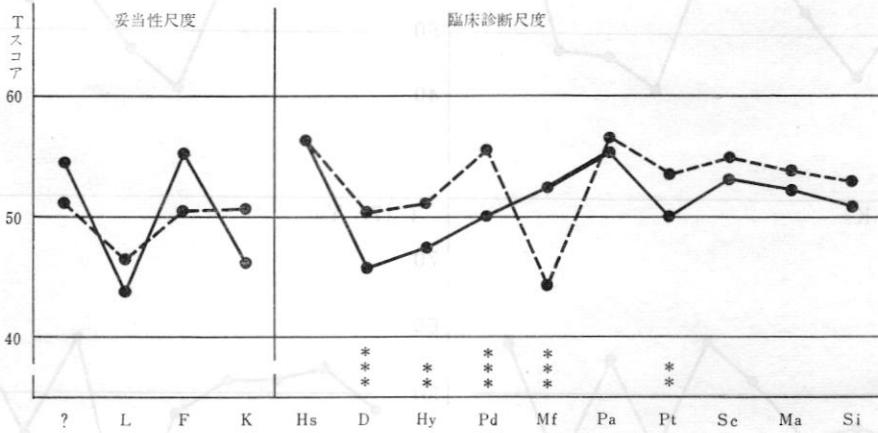
被検者のテスト受検態度を観察するための妥当性尺度では両群とも標準群とTスコア平均と比べて大きな差異を示していないから、次の臨床診断の各スケールの結果を信頼できるものとみて考察すると、B・B選手のTスコア得点はMfスケール(The Interest Scale)を除いて他の9スケール全部のTスコア点が女子学生より低い得点を

を示している。

(ロ) 両群の比較において、スケールごとにTスコア一点の差の大きなものについて有意差検定をおこなった結果では、D(Depression)Pd(Psychopathic Deviate)Mf(Interest)の3スケールが、0.1%の危険率で有意差を示している。またHy(Hysteria)Pt(Psychasthenia)では1%で有意差があらわれている。

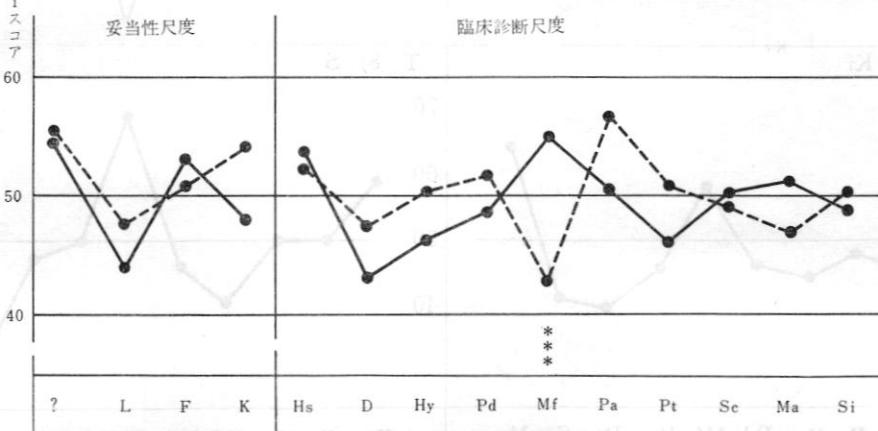
(2) B・B選手と同一集団にある一般女子社員との考察(第3図)。

全日本選手権に優勝したK銀行選手17人と同一職場にある一般女子行員20人との比較においては、Mfスケールにおいて危険率0.1%で両群



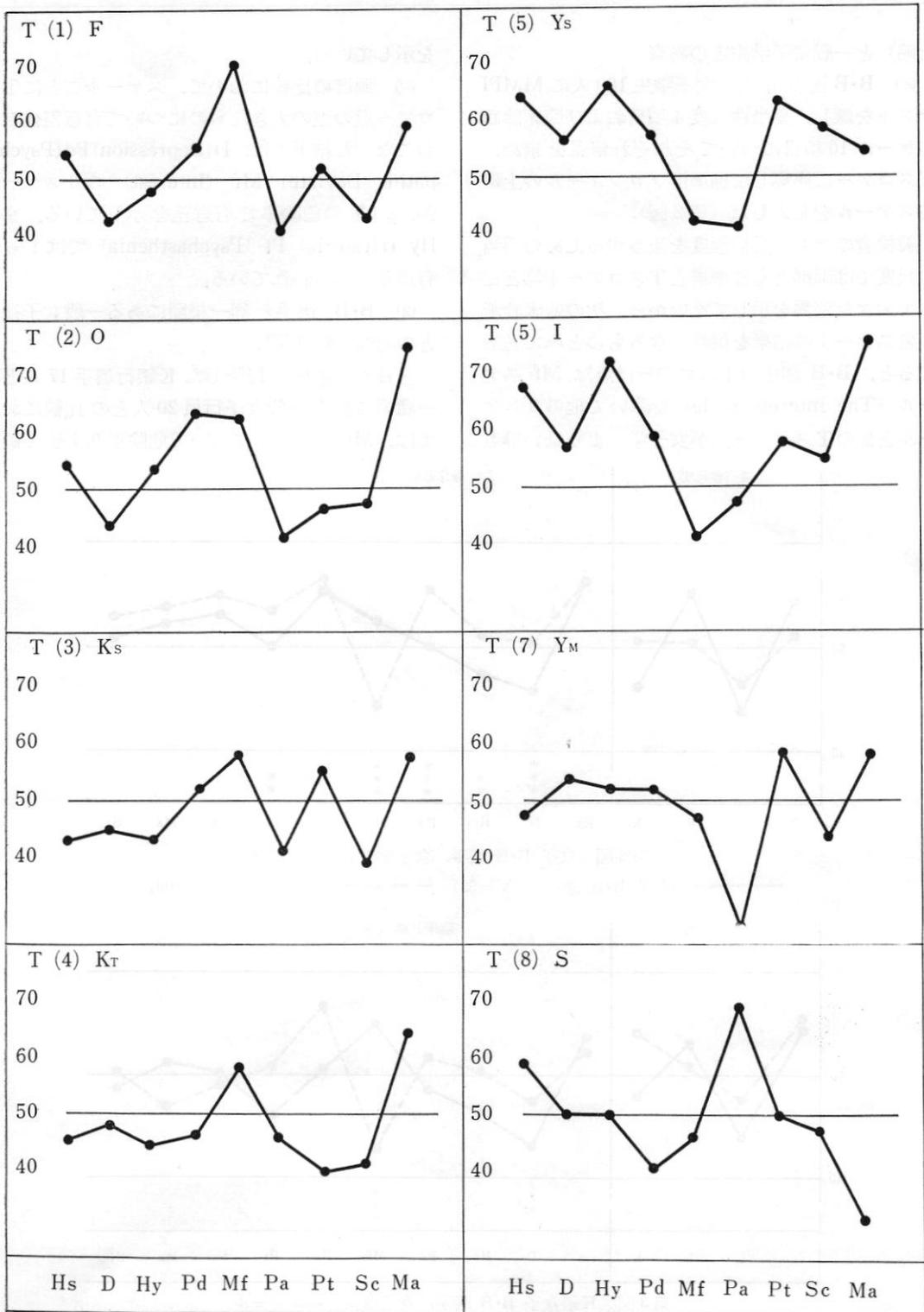
第2図 女子B・B選手, 女子学生プロフィール

—— 女子B・B選手 (N=52) - - - - 女子学生 (N=100)



第3図 K銀行女子B・B選手, 女子職員プロフィール

—— B・B選手 (N=17) - - - - 職員 (N=20)



第四図 R・R 選手の個人プロフィール

の間に有意差がみられる。

(3) 得点能力およびボール処理能力からみたB・B選手の個人プロフィール(第4図)。

関東実業団リーグ戦7試合と東西対抗戦2試合の計9ゲームに出場した選手8人について、得点能力およびボール処理能力指数の二面から総合順位をもとめ、1位~4位までをグラフの左側に、5位~8位までを右側にまとめたプロフィールが第4図である。

(イ) Mf スケールにおいては一般にA群(1位~4位)がB群(5位~8位)よりTスコア点が高い。このことはA群選手の興味のタイプ傾向がB群より男性的傾向にあるものと思われる。

(ロ) Ma スケールにおいてはB群8位のSを除いてはいずれもTスコア50の平均より高いところからみて活動的プロフィールを示している。

(ハ) 神経症的傾向をみようとするHs, D, Hy, Ptの4スケールの組合せからみると、A群では一般にTスコアが低いがB群では高い傾向を示している。このことからみてA群選手の方が神経症的傾向の少いことを示している。

IV 結 語

(1) 女子実業団バスケット・ボール・チームの中、上位にランクされるチームに属する選手の性格をMMPIのプロフィールから考察すると、他の同一年令層の一般女子学生、および一般女子就職者との比較において、バスケット・ボール選手は興味の持ち方がいちじるしく男性的傾向を示している。

(2) Hs (Hypochondriasis), D (Depression), Hy (Hysteria), Pt (Psychasthenia)の4スケールの組合せからみると、B・B選手はいずれも他の対象群と比べて神経症的傾向が少いといえる。

(3) オフィシャル・ゲーム出場の前選手個人々人について、得点能力およびボール処理能力の優れた者と、これらの点で劣る者との比較においても、優れた選手の方がThe Interestスケールにおいて男性的傾向が強くあらわれている。また神経症的傾向をみるための4スケール(Hs, D, Hy, Pt)

の組合せからみると、優れた選手の方がこの傾向が少いことを示している。

(附) MMPI の解説⁹⁾

MMPIは4項目の妥当性尺度と10項目の臨床尺度に分けられる。妥当性尺度が設けられているのは、一般に質問紙法による自己評価検査には、被験者が嘘をつけるという欠点がある。この欠点を避けようとする目的で、テスト結果の有効性を検討する4つの尺度が設けられている。各人のプロフィールを標準群プロフィールの中に記入し、4項目の妥当点が標準平均点(Tスコア50)と比べて大きくなれば、臨床尺度の検討に際して、その解答が有効なものとしてさしつかえないが、Tスコア点30以下または70以上の大きくなれば、臨床尺度に対する信頼性も少なく、有効と認めがたいものである。

A. 妥当性尺度

1. 疑問点 The Question Score

疑問点とは被験者が質問に対して「ハイ」「イエ」のいずれにも解答しなかったものである。疑問点が高ければ、それだけ他の尺度の得点となるべき項目が減るから、実際はもっと高くなるのではなからうかと疑ってみる必要がある。

2. L 嘘構点 The Lie Score

L点は道徳的にみて自分をよくみせようとか、悪くみせようとして記した場合50点からのずれが大きくなる。

3. F The Validity Score

記載にあたって不注意だったり、でたらめに記載されたかどうかをみようとするもので普通の被験者ならこんな解答をする筈がないものからなっている。

4. K K点 The K Score

臨床尺度のうち、Hs, Pd, Pt, Maの各尺度の識別力をより大きくするための修正点として用いられる。

B. 臨床尺度

1. Hs 心気症尺度 The Hypochondriasis Scale

自己の健康について不当に心配し、はっきり指摘できない身体的不調を強く訴える。

2. D うつ病尺度 The Depression Scale

将来に対して人並以上に悲観的だったり、無能感から志気が低下したり、人生を深刻に考えすぎて自信を

失くしたりしている場合。

3. Hy ヒステリー尺度 The Hysteria Scale

一般に心理的未成熟や反省力弱く、自我が強い傾向を示す。

4. Pd 精神病質的偏倚尺度 The Psychopathic Deviate

この者の犯しがちな行為は、盗み、嘘、アルコール耽溺、性的不道徳など一連の非社会的行為である。犯罪を犯しても動機に乏しく、ろくにかくそうともせず、深い情動反応に欠けている場合、点数が高くなる。

5. Mf 性度 The Interest Scale

興味の型がどの程度男性的傾向か、女性的傾向にあるかをみる。

6. Pa 偏執病尺度 The Paranoia Scale

過度に敏感で疑い深く、被害妄想を抱きやすい。

7. Pt 精神衰弱尺度 The Psychasthenia Scale

取越苦勞、自信欠乏。

8. Sc 精神分裂病尺度 The Schizophrenia Scale

社会意欲に乏しく、常人と変った考え方。

9. Ma 軽躁病尺度 The Hypomania Scale

計画をたてすぎて苦勞し、熱狂的、活動的でときに社会規範を無視したりする。

10. Si 社会的向性尺度 The Social I. E. Scale

他人との社会的接触を避けようとする傾向。

本研究に協力をいただいた西尾貫一助教授、平田久雄氏に感謝致します。

文 献

- 1) Booth, E. G. : Personality Traits of Athletes as Measured by the MMPI, Research Quarterly, 29, 127, 1958.
- 2) Hathaway, S. R. and J. C. Mckinely : The Minnesota Multiphasic Personality Inventory Manual (Revised.) New York.
- 3) 井村恒郎他 : 精神医学臨床検査法, 医歯薬出版, 217, 1959.
- 4) Bahlstrom W. and G. S. Walsh : An MMPI Handbook, Ch. 3, 43~85, 1960.

THE DISPOSITION OF FEMALE BASKETBALL PLAYERS AND THE RELATION BETWEEN THEIR DISPOSITION AND ABILITY TO SHOOT OR HANDLE BALLS

—A Comment on the Training of Female Basketball Players—

by

MIZUKI AOI

1. The results of MMPI on the disposition of female basketball players in A class teams show that they have a strong masculine tendency in the Interest Scales compared with average girl students and office girls of the same ages.

2. Judging from the combination of the four scales—Hs(hypochondriasis), D(depression), Hy(hysteria), Pt(psychasthenia)—the basketball players have a less hysteric dispo-

sition than the other control group.

3. The players who are good at shooting or handling balls show a stronger masculine tendency in the Interest Scales and a less hysteric tendency in disposition in the combination of the four scales mentioned above.

4. It is advisable, therefore, always to keep their disposition in mind in training female basketball players.

運動競技の勝敗に関する研究*

剣道・柔道選手の体格の大小，経験年数の多少，段位の高低と勝敗との関係について

笹原 六郎

I 研究目的および意義

運動競技における勝敗は選手の技能，経験，体格，試合時におけるコンディション等種々の要因がからみあって影響しているものと考えられている。運動競技のうち，体格が勝敗に大きな影響を及ぼす種目（例えばボクシング，レスリング，重量拳など）では，体格を考慮したウェイト制によって試合がおこなわれている。一般に運動競技をおこなう場合，身長または体重の大なるもの，あるいは経験年数の多いもの，または段位の高いものはその劣っているものに比較して有利であるとされているが，果してそれは事実なのであろうか。本研究では剣道・柔道の2種目を選び，試合において勝敗に関係があると思われるこれら要素のうち，体格の大小，経験年数の多少および段位の高低が勝敗にどのように関係しているかを明らかにしようとするものである。

戦後，武道としての剣道・柔道からスポーツとしての剣道・柔道に考え方が変ってきた。したがって剣道・柔道の試合において，もしも勝敗が体格等の支配を大きくうけることが事実であるとすれば，体育の指導管理の立場から現在の試合制度について，何等かの修正考慮を要するものと考えられる。剣道・柔道の試合において，これらの問題についての研究には，次のようなものがある。

1. 勝敗は体格や体力の影響を多くうけている。^{1) 2)}
2. 勝敗の要因には技能，練習量，練習方法，性格，心理的要素などがある。^{3) 4) 5) 6)}
3. 柔道試合における体重制についての研究。^{7) 8) 9) 10)}

本研究は，これらの問題点を一層くわしく追求した。

II 研究方法

1. 研究対象については，第1表に示したように，昭和33～36年度における全日本選手権大会および全国高校大会に出場した剣道・柔道選手を対象とし，試合方式は全日本の場合は剣道・柔道とも個人選手権，高校は1チーム5名よりなる団体戦であり，予選リーグ(1グループ3校)により16チームを選抜し，決勝トーナメントにより優勝決定をおこなったものである。

2. 全日本および全国高校大会に参加した選手の延人員は3,598名(全日本剣道167名，高校剣道1,933名；全日本柔道112名，高校柔道1,386名)であり，延試合数は3,126試合(全日本剣道164試合，高校剣道1,579試合；全日本柔道115試合，高校柔道1,268試合)であった。この人員および試合数は，全被検者のうち体格同等のもの，同一経験者および同段位者同志の間でおこなわれた試合および引分けを除外したものである。これらを研究の対象から除外した理由は体格の大小，経験年数の多少，段位の高低が勝敗にどのように影響しているかをみるためである。

3. 結果の処理については体格，経験，段位をそれぞれ3段階に区分したが，その詳細は第2表に示した通りである。体格(身長および体重の2項目をとった)区分の基礎は，一般の成人および青年では身長1cmに対する体重増加の割合は，およそ0.5～0.6kgであるので身長は5cm，体重は3kgを基準とした。

4. 本研究では，剣道および柔道選手の各大会における全試合を通して，個々の対戦成績を体格差によるグループ別，経験年数別および段位別に分類し，各差毎にその傾向を明らかにし，独立性

* ROKURO SASAHARA : Some Differences in Physical Constitution between the Winners and Losers in Athletic Sports